無感覚物体の涙

堀田　展造

BASE KOBIKI

無感覚物体の涙

目次

王族の剣と内臓触景を夢見る硝子シーツに包まれた眼球
羽虫の飛ぶ風景の転換
雨音
抵抗もなく
化石になった襞
『ガラスの犬』余韻
マルドロールの毒
ゼロの道化師
一点蝋燭主義
ミイラ
純潔の城
作り直しの天使

月の発狂
桜花ドーム
貴人語
郎女の官能
朽ちた窓辺
血だらけの『姿なき散歩者』
受動神経のトートロジー
合唱する街路樹
くそたれとくその間
犬が犬であるところ

あとがき

王族の剣と内臓触景を夢見る硝子シーツに
包まれた眼球

●

夢は夢であり独立しその影像は、「霊感の肉体」である、と瀧口修造はいう。
「影像は人間に約束された無比な表現である。　二つの宇宙に分裂された精の魔は恋愛のごとく、賽の目にも十字回転扉にも出没する。ここに燃える鍵が握られていた。　そしてそこに優雅な幽霊屋敷の秘密が握られていた。　かくして影像は霊感の肉体であった。」

（瀧口修造『夢の王族　一つの宣言あるいは先天的夢について』）

「ぼく」は感覚が証言する「汝」、「霊感の肉体」と化す。霊感に震え意識する足、銀河と交わる無数の眼、生きているミイラさながらにバラバラになり発光する優美な五体。おのれの五官の中に分裂したわが身である夢の影像を見る。汝は気味がわるい。陶酔の底、分裂と奇怪

な出現に慄き、夢の映像には甘美と恐怖が混じりあっている。「精の魔」の優雅な語りが「汝」の幻のタングステンの手を震わせる。「汝の認識はぼくの肉体内のものである」と瀧口はいう。

「足を真実へ渡してしまった精よ、ぼくの不具は優美である、汝はもはやこの世のものではない、汝の眼は銀河と見紛うほどである、汝の手はタングステンのごとくである、汝は棲息しない、汝は出現する。汝は恐怖せられる。　汝は気味がわるい。　汝の認識はぼくの肉体内のものである。　汝の五官がぼくの五官であることによってのみ、ぼくは汝の出現を信じるだろう。　どうぞぼくのなかの星を摘み給え、ぼくの夢の波に漂う星屑を。」

●

詩人は離脱不能の「霊感の肉体」の惑乱に悶える。おのれの内臓をかきまわしその手で星を摘み取ろうと奇怪な夢の中で五官は眩く発光する。惑乱は妄執のゆえではない。むしろ覚めた鋭敏な感覚が陥る、現実と紙一重に触れ合うゆえの肉感的な惑乱だ。甘美な痙攣とともにそこに統御不能のいわば内臓感覚の詩的転換への覚めた希求がある。すぐそこの現実性への詩的表出の欲望が「どうぞぼくのなかの星を摘

み給え」と言わしめる。夢の無限循環の坩堝と無碍の現実との接点において、「ぼくのなかの星」は何を指すのか。

●

星は通常、星座をなす。瀧口のいう「夢の波に漂う星屑」は不死・フェニックスの星座をなしているとされる。だが「ぼくのなかの星」でもあるかもしれないフェニックスは、「フェニックス星座」と名指されたその時いのちを失う。なぜならばそこで詩の夢は終るからだ。代わりにあたかも目覚めたかのように、ひとつの伝説・信憑であるフェニックス星座が地上に降り立つ。すなわち万古の文明の星座は数多の伝説とともに昼の法則発動のア・プリオリな要因となる。そればかりか星座的掟の焼き鏝は夢地にさえ星座の痕跡を残す。

フェニックスの灰熱が夢を焦がしている。この不死の焦熱がきっと「ア・プリオリに」夢をも突き動かしているのかもしれない、「ぼくのなかの星」なのだ。

●

詩人は鳥を追う。星座の星運を刻まれた鳥の眼は地上に何を見るか、と。死人の眼ともいえる鳥の眼が俯瞰する光景、それは厳格な星座の規律がア・プリオリに地上を覆う死せる記号の光景であるはずだ。瀧

口は地上の光景について、「水色の空に描かれた蜘蛛の巣の地図とその繁栄の都市よ」と半ば象徴的に半ば示唆的にいう。記号に対抗すべき細密画を意図する修辞だろうか。しかしたんなる細密画を欲するだけならば「霊感の肉体」は要らない。

●

詩人は精緻ながら武骨な配管記号を彫琢した文明の重厚の扉を押し開く。扉の向こうは、昼の配管概念を一挙に無化する夢の星屑、散りばめられた星座以前の星屑の世界だ。フェニックスの星座を離れたいのちなき不死鳥の自由な世界だ。

詩人は仰ぎ見る夢の星屑のもとでたちまちに不死鳥の至高の妖力に囚われるだろう。妖力により脳力の琴線であろう霊感と脳髄の芯まで絶対官能に撃たれ、詩人はフェニックスの不死の魂を生きることになる。不死の夢と妖力。官能の上質な恍惚が詩的イメージとして結晶し引き攣り合っている。幸福な詩の凡ての発見の有意義がここにかかっているからだ。

●

「そこに飛ぶ虚妄の神よ、虚妄の薔薇よ、不思議の時間よ、謎よ！」と瀧口は叫ぶ。虚妄と隣接する夢は霊感のための生存圏として永遠で

ある、夢は先天的だ、と瀧口は追いかけるように宣言する。夢想の先天的普遍性は無効用世界に対してもある種の特権を主張するかのようだ。当然に無効用世界である「超現実」、夢の特権の主張とは、効用に対する忌避ゆえに棄損を免れた不毀の美しい妄想の特権、その必然の仕組みを伴う特権の主張にちがいない。賛美すべき虚妄。「霊感の肉体」は見えない特権者の狂った叫びと気配に包まれている。

●

星座以前の星屑世界はつねにそこにある。ならばこそ「超現実」とは擬似荒地でもなく虚妄の夢でもない、何もかも凡庸にある物たちの究極の裸形世界、星屑世界にほかならないと言い換えられるだろう。

隈なく拡がる「超現実」の全荒地のどこにも絶大な効用である王の絢爛たる歴代の衣装は見えない。しかし近寄りがたいはずの「王族」といわれる一族のありふれた素顔そのものの露出がいたるところに平凡にそこにあるというべきだ。

王は遠くかつ近い。現前と錯覚を嘲笑うように、夢の王族という象徴的な特権論理が宿根のようにここにある。そうでなければひとはたんなる裸形世界を美しい「星屑世界」と称することはないだろう。「超現実」の荒地において妄想ならざるフェニックスの先天的夢の宣言、汎現象的王的地位の強調が繰り返される。「超現実」の荒地に本気の

宿根に相応しくすっくと立つ王と詩人が目配せし合う。

●

妄想や天や神に憑かれることもなく、むしろ月並みな象徴を装う虚妄の薔薇を「空幻の森の点景に配置させる」冷静な用意周到とともに、詩人は夢の王族が振る舞う「超現実」の不可思議な生の現実性を引き寄せる。それは瀧口にあっては新たに獲得しえた無制約な特権である「霊感の肉体」の現実性にほかならない。

「永遠に魅入られた探求の精神はつねに想像の鏡を潜る。　ぼくを一瞬困惑さす鏡の間よ、それは還元しえない透明な結晶であった。」

「ぼく」は、困惑と惑乱を秘め「想像の鏡の間」において立体鏡面に囲まれ寝台に横たわる。想像の鏡の中で「霊感の肉体」と化した「ぼく」の網膜は「還元しえない透明な結晶」である硝子シーツに変じる。詩人はあらゆる感受性の反射をそこに埋め「霊感の肉体」を完成する。還元しえない透明な結晶としての詩が霊感の肉体の現実性だ。

●

霊感の感受性において想像の鏡の中に王族のきらびやかな衣装が

写っている。しかし効用の衣装ではない見え方だ。王冠の目のように観察者自身の目が透明な結晶として映し出されている。しかも見えることにおいて王あるいは観察者の目は大地と物の世界の点景にすぎないようにも見える。点景がすべてであるように見える。

点景の目はやはり王の目だ。というのは王の視線だからだ。遍く全体と細部に分け入り密着する眼球観察者、しかもその目はどこまでも随伴的にかく観察する探求者であり汎存在者でありしかも象徴の王として透明者だからだ。目そのものが王として点景として同時に存在すると見える。

●

探求のすべては、困惑と惑乱の一種のウロボロス的循環に嵌りつつ、「霊感の肉体」を探る行為だ。己れのいわば内臓感覚に触るような基底的な自己言及の表出にほかならない。

王は鏡の中から煌めく詩語の剣を突き出す。発語の行為は覚めない夢の中なのか外のことなのか。尽きない自己言及の果てに「ぼくのなかの星」が取り出される。「ぼく」は懐かしいあの不死鳥の目玉にも似た星のガラス玉を掌に包む。指先が増幅やまない内臓触覚に慄く。おお、懐かしすぎて殺したかもしれない鳥の生死は「ぼく」にはわからない。

掴みどころのない影像として「霊感の肉体」が亡霊然として留まっている。執拗な亡霊、生きているミイラの「霊感の肉体」だ。そいつは己れの影像なのに手の届かないひとつの無感覚物体だ。硝子の網膜に冷然と宿る無感覚物体、しかし自己言及ゆえにもがいても距離のない内臓触覚に等しく減衰を知らず生きている無感覚物体……

羽虫の飛ぶ風景の転換

羽虫の飛ぶ風景

中村稔

言葉にならないで怺えていたものたちが
一日の仕事を終えるころには
淡いえんじ色の嘆息となって私をつつみ
無数の羽虫のように飛びかっている。

辛夷や連翹の咲く花粉期、
皮膚の毛穴という毛穴から
羽虫たちは私のなかにはいりこみ
脳髄や内臓を喰いちらす。

ある花が別の花とちがうほどには
私が他人でないことも

他人が私でないことも
まことに不確かな関係の存在であって、

やがて私は蜉蝣のように透明になり
ある朝、死んでいるのであろうが
それでも私のまわりを無数の羽虫が
淡いえんじ色に飛びかっているであろう。

（中村稔『羽根虫の飛ぶ風景』）

私に襲い掛かる現実の課題の多さのせいだろうか。むんむんと襲い掛かり「嘆息となって私をつつむ」羽虫の群れ。詩の入り口に立つ者を迎える羽虫のざわつきは、嘆息、憂愁、「仕事」の重圧に塞がれた私のやりきれなさを表す。花々の花粉期、生物の繁殖期、毛穴が全開する敏感期、この季節にも虫どもは私の存在を根底から覆すかのように私の脳髄や内臓に侵入し喰いちらかす。羽虫群は私の在り様がなんであれ私をまるごと征服する。ざわめきの極みに、言葉にならずとも「怺えていたものたち」を転換せしめるその入り口に、詩人にとって身を包むざわめきの向こうにある転換、否定の契機が仕組まれる。

私は他人ではなく他人は私ではなく、私は何ものではなく、「やが

て私は蜉蝣のように透明になり」捉えられない存在となる。その私の死後も飛びかうであろう羽虫。他人にも私にも生者にさえも属さない不確かな風景が露わになり、私は入り口に面しているというのに忽ちに脱出不可の羽虫の世界にすでに投げ入れられていることを知ることになる。そこに何者ともいえない者が横たわり、彼はきっと耳をつんざく羽虫の羽ずれの騒擾のなかで聞こえないはずなのに鼓膜を震わせているのかもしれない。生者の妄想をもかき消すこの世のものとも思えない金属的な羽ずれの音だ。

淡いえんじ色の羽虫が私のまわりを飛びかい私も同じ色の群れのひとつになる。不確かと形容される世界は変容するグラデーションに彩られる。網膜の血色に見紛う赤えんじ色が激しく旋回する。羽音がもっと昂じ、徐々に高周波色域の紫色系えんじ色へと昇華する。極限の騒擾。色域の周波がついに透明に隣接する限りない薄さになり、無音に等しい聴音の極みで羽音も無化され、転換は語の外で、生者の毛穴から一気に死者の透明な無感覚へと誘う。薄い膜、滑らかな羽の形、壊されない金属性のみが輝く。語にならない底知れぬ悲しみがぐるぐる回る。

詩は金属になる。金属羽虫が、「一線」を越えた転換への、思考に

内包する否定の契機として脳みそを掻きまわすとしても。私が死んでいるであろうある朝、詩は風景としてひとり外面に接し薄い羽を震わせる。

雨音

分厚い雨音が餓えたトタン屋根を突き破る
アスファルトに強い梅香が立ち込めていた
白い雨脚がさらに殺気立つ　十八の春
俺は窓から唾を吐きラスコーリニコフの手斧に向き直った

抵抗もなく〈高音領域への助走〉

抵抗もなく拡がる肉のない感覚　そこから生え伸びる発情の白い指
と気高い爪　胸の金属弦を虚しく掻き鳴らし
気息も濾過し突き刺さる直線高音　感覚は周縁のない完全球体の伸
縮に等しく　薄い雲母片の震え　乾いた空気が囁く

稀有なしかし近すぎてありふれた気づかぬ出会いのように　慎まし
い単純な等号である指と弦の離接と融溶　ならばこそ昼の顔には表
れない無響の切なさ　は

膨張と滞留　空虚の内包を確実にし　ひたすら千年の思考の夢へ
異化と否定の機のみをめざし　金属直線語の削り屑　迸り身を縛り
やがて眠りの中へ　穏やかに降り注ぎ　吹雪の縦横の光点と極光
沈黙する牡蠣の密かな発電の仕業でもあろうか　不眠の海流に操ら
れ　とめどない牡蠣のしわぶき　は

軽々と指と弦の隙間に消え去り／蜻蛉言語の／無限発熱する神経の
棘の息苦しいそよぎ／不眠の上澄みにすぎない青々とした同じ高音
領域へ／継続する透明回帰がそうなのか／空を翔ける小さな金属昆
虫の狂躁の領域ともいえない／無響震動するばかりの耳室の奥／受
動一方の至近至上の／銀箔の内耳は静寂に満ち／余韻なく深深と鎮
まる高音領域　は

化石になった襞

偽悪を盛るワイングラスであれ毒抜きの餌と恥の喝采に沸く鼠坑道
であれ小屋兎の耳穴を赤く膨らませねちねちした共犯伝説塗れの分
厚い口唇と鼠の狭い額に反響するおのれの排泄の轟音にすぎない
代々の集落の千年の呪文と私語もどきのつねに使用済みの廃液言語
の濁流絶えない同じ地層の地続きであろうか超高層圏のゼロ気圧ゆ
えに伝播不可の無音の壁に囲まれ張りつめた金属弦の金色の悲鳴の
ほんの直前の瞬間ともいえない厚みのない垂直の予感のみが出会う
うっすらと毛羽立ち静止し蝶羽の囁きが起こすあくまでも慎ましい
単純なそれ自体上澄みのまだまだ爆発発生することなく溜めこんだ
無尽のエネルギーの巨大なマグマに比せられひたすら高速回転し父
祖伝来の肉厚の仮面印影を今こそ根こそぎ剥がせと叫喚の長い糸も
まるごとこれらすべての展開を刻んだ深海の牡蠣の柔らかな脳を揺
すりついには化石の汁あるいは襞として押出され変哲もなく次々に
日々顕現し蜻蛉の透明回帰があるばかりの至近のちくちく。
(この息苦しさを化石の襞という、ということを確認するために書い
たありがちな糞語襞模様)

『ガラスの犬』余韻

路地裏に暴かれるべき仕掛けはなく。　薄闇に点滅する劇場脇の赤い灯も。　陶酔は飴色の白昼を呼び戻し。　迷いこんだ顔のない犬よ。　仄暗い地面に落ち。　影は犬の頭蓋骨の透視像。　涸れない力の源泉をそこから受けようと。　声を脱出させろ。　場違いのぎこちない犬声よ。　強い風に似た唸り。　真正の夜の葉ずれ。　湧き出す縦横の金属音。　夜に出現する犬が見る白昼の夢のように。

主役は代役だらけだ。　鉛のスローガンがこだまする。　「私たちは犬の仲間なのよ」　階段に整列する石膏像が出番を待つ。　合図とともにクレーンの鋏が踊って群集を整髪する。　脳髄起電流をコピー用コンセントから流し込まれようとも。　間違っていなければ。　永遠の振り子が洋上を走りぬけガラス色の時を告げる。　覚めることを知らず。　路地裏の明かりの部屋で仕上げの最後のミシン針が止まる。

マルドロールの毒

この一ヶ月ほど、マルドロールにはまって、そのせいかどうか体調を崩していた。それほどの読者ではないのだけれど、読むたびに実際内臓が麻痺だ。毎ページのように不気味なイメージのオンパレードが、「僕は人類の一員ではない」と、おどろおどろしく叫ぶ。

「ぼくの人間への憎悪を忘れるな」。これは道徳箇条への野党的な反発などではない。人間回帰的物言いの反転ではない！　多種の生物のメタモルフォーズが意思や変身を担保する回帰の場として語られ一義的人間回帰は拒否される。(言葉を食う)、奇怪な経験を著者とともに数週間毎日のように辿ると、強制解体されるような異質感に犯され、食傷し、その毒効はてきめんだ。暴虐な著者は本文で公言している。この作品は「読者を白痴にすることが目的である」と。

周知のように、『マルドロール』が文明と人類を敵に回すことに熱烈な拍手を送ったのは若きル・クレジオだ。晩年の『愛する大地』の

タイトルの真意は「憎悪」の烈火の花々で飾られる大地への執着の意でもある。「愛する大地」とは人間・形而上学の煩い存在をさっぱりと掃除した世界だ。同時代作家であるキニャールも『音楽への憎悪』で同種の「憎悪」を激しい口調で綴る。憎悪の象徴であろう「声」、とくに歌、詩、音楽のロマンに染められた「声」の排除の跡地には、神々の残忍な儀式の光景が繰り広げられる。彼らの作品は読者を普通に喜ばせはしない。毒に対する免疫を破壊し脳みそをぐにゃぐにゃの泥にしてしまう。効き目があまりないとすればこの毒に対して鈍感にして免疫が強い「人間らしい健康人」だ。

マルドロールは神を頂点とする人類の磐石の免疫武装に対して正面から挑戦する。体系立った数学と感染的で浸潤しやすい道徳武装のことだ。(マルドロールの「数学賛美」を額面通りに読むことはあまりにも人間的すぎるだろう)。免疫飼料を求める家畜然とした人間美学と人類読者を蹴散らす。命乞いする青春の額に銃弾をぶちこむ。クレジオもいうように、一言一句をそのために総動員し蹴散らした結果、不可能な「読まれない作品」という希少な位置をものにした。(ブランショがいうように「大衆小説のパロディ」だとする六の歌はなるほどちょっとは保留かなと思う)。

神経症に悩むくらいなら何も無理して読むこともない。じつは毒を中和してくれたのが、併読したどこか親しみやすいブランショの『ロ

ートレアモンの経験』だった。とはいえ整然としたこの論考じしん、深淵、多層、多階調、回転の眩暈世界を開くもうひとつの輝かしい「経験」そのもので、読むことはくらくらする経験なのだが、しばし毒を忘れさせてくれるようだ。いやそうではない。「頭上の花」に手をかけつつ毒の沼に足を突っ込むあやうさに満ちた、そういう経験なんだと気が付く。「腐りかけの足なんかいらない、頭に高速エンジン翼よ生えろ」、下水溝のコオロギに変身したマルドロールは、軽やかな虫の翼に飛翔の夢を託そうと、彼らしい「イロニー」で身構えているんだ。どこまでが素直なのか、やはり毒は抜けない。

余計なことだが、デュカスの謎とされている死因が、遠因でもなんでも、溜め込んだ自家毒と反応したウイルスによる毒死と勝手に推断すれば、デュカスは先の保留を吹き飛ばす威力ある純毒の塊だったんだと納得する。作品は読者の脳みそを破壊するだけでなく著者も殺した。そして文化免疫の瘡蓋で固まった読者だけが、「読まれない作品」という有難い囲いのおかげで頑迷健康な人間読者として毒の災厄から免れる。人類は雲霞のごとく繁殖する。

ゼロの道化師

衆目をドーム舞台の真中で集め、彼は完璧な道化師だ。ところが観客の中の一人の目の色が変わり、集金人の目になって彼の前に立つ。道化師は通帳に刻印された口座名義人に引き戻される。金を払えばどうなるのか。無視の肘鉄を食わせるか。どちらが望ましいことなのだろうか。集金人は台本通りの舞台のサプライズにすぎないのかもしれない。ならば別に驚くこともない。

集金人は万能者然として冷酷に舞台の幕を引き道化師を丸裸にする台本も請けていると脅す。その上で可能なあらゆる属性を尽くせば普通に空気を吸う(魚なら水中に浮く)ように無傷の限りなく薄い存在、ゼロ存在になるはずだ、と気軽に説教する。うさん臭さに辟易する。ドーム天井に向けてあいつのお気に入りの魚体の影絵幻灯機を力いっぱい回す。つまりあいつの口調そっくりに台詞を言う。影絵師だってあいつのいう属性のひとつではないか。幻想を操る道化師の方が一枚上手だ。ともかくどうぞ舞台を続けてくださいと言う。

道化師の芸は回転梯子。空気抵抗さえ無効にする真剣で見事なぐるぐるまわりの芸だ。梯子には特約リースの人間椅子が固定され演技者はそこに座る。椅子を探す面倒くさいことはひとつもない。哄笑と喝采がドームを満たす。錐揉みのあまりの高速回転のせいで空けたおのれの穴に消えてしまう。うるさい集金人も道連れだ。脱ぎ捨てた衣装が劇場に飾られている。これも喝采したがる観客のために残した道化師の気遣い芸のひとつだ。

一点蝋燭主義

少女は少女の歌をうたい・・・その部屋の壁には蝋燭が照らす影絵。
蝋燭は家紋入りの猿の脳みそから抽出した。

ミイラ

空虚は清潔と嫌悪の二つの仮面を付ける。皮膚・衣装・仮面を順に被る。ミイラになる。気持ちよく息を吐く。ミイラへの嫌悪さえいとおしい。勇んで空虚の仮面舞台に立つ。空虚は時に甘い狂気の蒸留気体だ。でなければわざわざ舞台なんかに展示されたくはない。嫌悪は正しい。しかしそれほどまでに清潔好きならばミイラはすべて剥され空虚からも遠ざけられる。やはりミイラだ。

純潔の城

「海には欠けている無の一滴を飲み干す」とマラルメはいう。（マラルメ『イジチュール　エルベノンの狂気』秋山澄夫訳）　無を無時間の詩語である真夜に繋げる。同じく海は時間を欠いた空間だ。移動（二つ以上の事物的存在者の間の存在様式…とハイデッガーの「間」の記述が思い起こされる）や物の形を前提とする変形の痕跡は一切ない、それだからマラルメは最後に「形の亡霊」のような「純潔の城」だけを残す。

無の一滴、無時間の真夜を飲み干す。イジチュールの行為は、時間の終局、空間の限界を欠いた絶対の無の中で遂行される。「純潔の城」とはいわばのっぺらぼうゆえの何の障害もない空間のことだ。合理的に言えば「間」のことだろうか。マラルメのこの章句はテクストの最後に置かれていることがポイントだろう。つまりこうして行為がここから始まる、「すべての始源」はここにあるという示唆だ。

暗い路地には誰もいない。父も母も山河も見えない。　安堵の海面

さえない。暗い海らしき空間に、無限に繰り返し生起する同形の波頭の牙だけが残される。こびりついた昼の声が恐怖の叫びをあげる。変化の一切を欠いた無というトートロジーのみを延々と繰り返す真夜。時間も形もない巨大な空間、「純潔の城」。詩語が始まりを指示する。始まらない始まりという「間」のような足踏み状態が続く。

「間」に相応しく熱く対応するまなざしはない。柔らかな理解の端子はない(語と音はあるが詩語も楽譜も解読不能だ)。かくして亡霊の住処のような「純潔の城」が「すべての始源」だとすればこの城の不毛は無限の豊穣のはじまりだ。可能性は詩語の最後からはじまる。

作り直しの天使

「・・・イジチュールは、倦怠となった鏡のなかに己れをさがし求め、時間のなかに消え失せ次いでまた呼び返そうとしていたかのごとくまさに姿を消そうとしているぼんやりした己れにまみえて。かくしてその時すべてのこの倦怠、時間から、彼はつくり直された、身の毛もよだつ空虚な鏡を見、そこに希薄さ、雰囲気の欠如に取り囲まれた己れを見出して、・・・」（マラルメ『イジチュール　エルベノンの狂気』秋山澄夫訳）

イジチュールは、おのれが消えていく時間の痕跡を倦怠が支配する鏡のなかに見出す。部屋の不動の壁掛け、カーテンが倦怠の時間に浸り饐えた脳のかりそめの休憩の幕間を画すかのようだ。それらすべての像を抱えて鏡面は凍結する。イジチュールは冷たい表面を彷徨う。「身の毛もよだつ空虚な鏡」、「そこに希薄さ、雰囲気の欠如に取り囲まれた己れを見出す鏡」に囲まれる。

作り直しはすべて倦怠の鏡と時間の中で行われる。囀る脳の鳥になる。倦怠ゆえに終わることはない。言い直しは不可能だ。

空虚な脳を包む掌が囀る鳥になる。語り口、エクリチュールの表面のみが延々と続く。分子状の語り口。そこに「まさに姿を消そうとしているぼんやりした己れ」にまみえる。脳の鳥。おお、幸いにも、作り直しの天使は、語り口における囀る鳥の天使だ。聞こえるぞ。再び人間役者に戻る束の間の幕間。なおも延々と倦怠の時間、ゆえに終わらない休憩の幕間。不易の冷たい表面、この稀有な隙間に作り直しのための剣を差し込む。空虚の鳥が聞こえない詩語を囀る。

いつか倦怠と脳の鳥について冷静に語ることが出来るだろうか。それは作り直しといえるだろうか。休憩の幕間は終わった時なのだろうか。終わるとは何のことか。

月の発狂

幾千の夜　引き裂かれ　ついに凍りつき　幻想の窓に貼り付く氷花
　自ずとぼうと輝き続け

記憶の海が湛える無色の悲痛　あるいは流星の度を越した衝突の興奮　月光が帯電を神経に烙印する　顔を失い頬骨も崩れ落ち　明々と晒される月の裸体　こいつが氷花の生命体だと？

月の細い歯が窓ガラスを齧る　紫色の放電に打ち震える獣
月の発狂がやむことはない。

桜花ドーム

トンネル内部光景とも腸内光景とも見える派手な桜花ドームの天井あたりに疾患部であろう癌種のような黒ずんだ傷痕があって、これらの全体構図を下方空間に横たわる水面が濃度を下げてほぼそっくりに反映している。画面中央にはトンネルの出口かどうか暗い半円の穴が描かれている。

嫌なことの悪無限を避けようとひとは便利な言葉を持ち出す。彼岸と此岸。お構いなく自壊を本来の運動法則とする内部深淵へと落ちていく。暗いトンネルの中の川船から見る桜花ドームは恐ろしい。どんな岸にも寄らず川船は止まらない。

貴人語

貴人と奴婢は口も聞かない。それが『死者の書』のみそだと読む。貴人の言語(超越を受け入れる澄んだ完全受動意識)＝基底としての折口的文学意識と奴婢言語(語り部の超越論的言語、物語、世ばなし、日常世界言語)が物語を織り成す。二つの言語が決定的に離別し、二層化が固定化するとしたら、文学は、とんでもなく遠いどころか理解不能が当り前になる。ひとは神の言葉をひとの言葉として聞くしかないからだ。

貴人の郎女は素敵だ。奴婢であれ仏であれ滑らかに言葉を交わす。発しているのは貴人の声なき言葉だという。感覚だけが存在する身体なき命というスタイルだ。郎女の肉体は色身だという。

郎女の官能

折口は郎女の官能、肉体の匂いをほのめかす唯一(たぶん)の言葉として、「色身」という。近寄れそうで遠い。

朽ちた窓辺

遠い浜辺の道　海鳥が月光の足跡を追う
板壁に打ちつけた銃弾の黒い木箱
　一つ残らず積み替え
波打ち際が齧った無数の秒針と
三角形の真新しい歯車を噛合わせる
山風に震える電線を引きちぎり
美しい二重奏音符を組み立てようと
壊れたフルートに夢中だったあの時の
氷漬けの息子は　まっすぐに異邦人になってしまった

水平線の剃刀が廃船の帆柱を切断する
夕月の首吊りがはじまる
氷雨が死船の腹を撃つ

乳色の少年の脳髄ゆえに　俺は夢の果物なら何だって愛した
卑猥で傲慢な眼底文字盤よ
　嫌悪の自動振動と逆走する秒針の影
　蝕知と融和の交差臨界　そこに夢の見張り塔が聳えていた
立体時計が退屈の夜明けの穴を開く　だから
その小さな穴からオレンジ色の海鳴りが溢れ出すんだ
遠洋を渡る未聞の二重奏音を響かせ

青白い骨笛が泣く
風に散らばるカスミソウの花の声よ
目覚めの薄虹色の縞模様　湯気立つ溝川を揺すり
ゆらゆらとあの歌を口ずさみ
穏やかな浜辺の匂い
朝の日差しに輝く朽ちた窓辺よ
新品の教則本が次のページを開く

《われわれは教則本を学ぶ以外には道はなかった。壊れたフルートの奇妙な音色を愛し、幻覚の秒針が重なり、立体時計なるありもしない時間交差ベクトルがもたらす稀有な領域を所有の感情で埋めるとしても。少年らしい乳色の脳髄スープと青白い骨と底無しの眼球。こい

つらが溝に流されようと。立体時計の内奥構造なんて、しょせんその程度の遊びなんだよ。観客なんか呼ぶな。》

嫌悪を押し殺し歩く。それでも俺は教則本職人は好きだ。何だって出来そうだ。空騒ぎほど面白いものはない。教則本の指示通りに朽ちた窓辺の光景にくぎづけだ。

血だらけの『姿なき散歩者』

御者は鞭の嵐を馬の背に浴びせる。舗石を鮮血に染めて馬がどうと倒れる。群がる人々。血の海の中で馬の首を抱く。「その中にすべてを見ている眼」がある。よく知られた箇所だ。カフカの『姿なき散歩者』は、あらゆる風景を隈なく眺めるばかりではなく毛穴に風を通すように肉体を全開して世界の中に組み込まれている。

継ぎ目のない観察者の目、潤滑な振舞いと連結の語。おかげで周囲からどんな種類の疑惑も受けない完璧な存在を開く。存在における完璧な受動連結手としての肉体、目は風を通す受動透明者の目だ。

姿はない。しかし散歩者は「かつてではなく」「ここにいる」。あらゆる風景と毛穴まで埋められた完全受動者の「今」。**此性**、この普遍を徹底する。すると形も肉体もなく見えそうで見えない。驚くことなど何もないはずだ。この意味に寄り添うようにさえ気楽に振舞う。振舞は私はうそつきだというアルトーのように強がりにも見える。翻っ

て問う。平凡な光景のほかに何があるのか。もういちど目をこらす。交差点を急いで渡る老婆。血の海の中で馬の首を抱く。駆け寄った散歩者は血だらけだ。完璧な行為の透明の中に血だらけになる完全受動者のあらゆる感情が込められている。鞭の嵐を受けた馬。散歩者と言われることにも苛々する。

受動神経のトートロジー

＊絵本学者の注記＊　［隕石の光るかけらにもあるという神経の突起について］〈はじめはしかつめらしく〉（星の石が感受する　記憶する　命令する）　同質者の睦み事でもあるこれらの根元的な受動の作用に注意したまえ

神経には免疫はない　鏡のように律儀に異質者を歓待するがお人好しではない　ほら昨日の垢で着飾った名詞の行列に出くわす　おかげで恥辱の電流が発奮する

透明な髄液がふつふつと沸く　新種の動詞が発動する　かまわずがつがつと捕え食べ膨張する　ぴくぴく動く石へと育つ　神経一般とは　問答無用の発情動詞へと瞬間変換する憎悪と悪食の器官だ

では神経の作用をどうして受動態というのか　慇懃に受動をよしとする恭々しい法の睦み事をこっそりと望んでいるのか　引用ではなく生まれたての神経を見ろ

隕石が光るかけらを落とす　繊細な曲線がそよぐ　先端には小さな鏡である眼の突起　息を吸い膨らんだ思考の小便を振り撒く　水中で髄液まみれの神経言語の糸を吐く　つまり光と空気と水を受け取るためだ

受動のトートロジー止りだ！

合唱する街路樹

〈息子への私信〉

黒い向日葵の種を信じて花房を遠くに飛ばした。焦熱の季節だった。黒い太陽の花首がうなだれる。喧騒の交差点。奇跡かもしれない沈黙のピチカート。耳奥に無音の穴を空けた。真夏の街道は楽曲のように見事に整備されていた。道を信じることも楽譜のとおりだった。

どこかに忘れた片足に気づいて振り返った。そこは街道の果てらしい静かな山上の葬場だった。恐ろしい装置が山腹の洞穴にあった。休符の信号機が曲がり角で瞬く。鋪道なら休符信号は当たり前ではないか。片足が笑っている。必需のスリッパをきれいに整頓して早く地下に潜れ。山腹の洞窟は蒼穹への入り口なんだ。蒼穹は望んで対面するものだと地図に書かれていた。それすらも知らなかった。

真夏の街道はいつだって光っている。洞穴から澄んだ風が吹いていた。街路樹の青葉が風とともに合唱する。歌詞は、はらほりはりほら。ふ

と風向きが変わる。恐ろしい装置で焼かれた枯葉の怒った濁声が歌詞に混じる。無欲であった父の父のように何も望むな。ただ蒼穹の青に染まれ。俺は震えながら、間に合わないと知りつつ、歌詞にあわせ片足を詫びつつ、祈りの血に染まった花弁と黒い種を青い空に撒く。忘れてはならない仕事なんだ。

黒い向日葵よ　艶やかにきっと咲いてくれ

くそたれとくその間

深更の路傍　青白い花の首　夜露を払う潔よさで毅然と明け方を待っているはずだ　いつまでも

石を撃て。かんかんと。

石になる女ともいえない石。

昂ぶった花の吐息。夜陰に向かって撃鉄を引いた。轟音。幻想は予兆だ。憎悪はつねにはみ出していく。この決り文句は痛い。夜更けの路上は花芯がお構いなく青白く熱していく。暁の薄い雲が消えた。風化する雲。うろこ状の雲。俺は眩しすぎる光線を引き寄せる。歩行の秘密だ、「なんたらするとなんたらの間の存在」とメモをする。

犬が犬であるところ

雑踏を吸い込む天空公園口
行き止まりの地下階段室
穴倉は寡黙が掟だ　消えたのは誰か

青い煙　空中オルガン　終楽章はなく
置き去りの天空の虹よ　泣け

一段ごとに壁は厚くなる　この証言は嘘だ
新月が壁筋に細い光刃を滴らす
焼け残った真っ白な顎骨と牙
黒犬の眼球が石切り場を横切っていく

（了）